HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	北海学園大学人文学会記録　第６回例会　マクルーハンのメディア論：サイボーグ論のプレテクスト
著者	柴田，崇；SHIBATA，Takashi
引用	北海学園大学人文論集(52)：39-74
発行日	2012-07-30

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

北海学園大学人文学会　記録

第 6 回例会

マクルーハンのメディア論：サイボーグ論のプレテクスト

柴田　崇准教授講演

○司　会　それでは始めさせていただきます。きょう報告してくださる先生は，柴田崇先生でございます。報告のタイトルはマクルーハンのメディア論ということですが，この柴田先生は，ことしの 4 月にこちらの大学に赴任されました。中央大学を卒業後，明治学院大学修士，東京大学修士，博士課程を経て，前は映画専門大学院大学というところで働かれていたのですが，こちらに来られました。最近，日本カナダ学会の研究奨励賞優秀論文賞を受賞されました。

それでは，報告をお願いいたします。

○柴田氏　柴田と申します。よろしくお願いいたします。きょうお話ししますのは，マクルーハンのメディア論です(スライド 1)。副題は，パワーポイントにも出ておりますが，サイボーグ論のプレテクストといたしました。

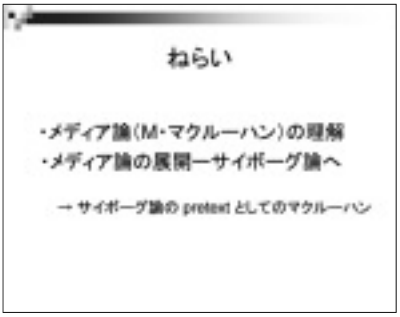
スライド 1

この講演の「ねらい」です(スライド2)。まず第一に，メディア論といってもいろいろありますが，マクルーハンのメディア論についてざっと御理解いただきます。理論的なお話をします。それから，「ねらい」の二つ目は，メディア論を展開していくとサイボーグというものを対象に研究しなければいけなくなるというものです。私が今最も関心を持っている分野です。サイボーグの研究はマクルーハン研究から必然的に導き出せる，ということをお話します。

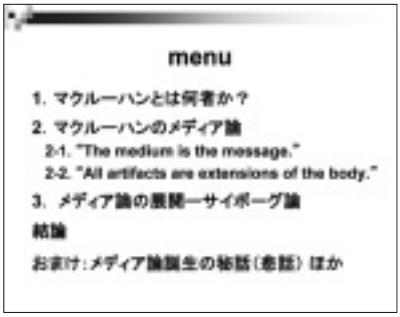
授業でサイボーグやロボットの話ししますと，先生，それはメディア論じゃありません，という声が上がります。しかし，関係ある，という話を学生にもしております。プレテクストには，口実とか，言いわけという意味とともに，先行するテクストという意味を込めました。メディア論の授業でサイボーグについて話すのを，ここにいる皆様に認めていただきたいという意味を含めて，このような題にしました。

さて，きょうは時間の関係もあります(スライド3)。できればパワーポイントの資料にあります「おまけ」まで触れたいところですが，ともかく，大まかに，結論を含めて四つの章立てでお話しして参ります。

まず，「1．マクルーハンとは何者か？」(スライド4)。写真の人物がマクルーハンです。比較的晩年の写真です。ざっと経歴を御紹介いたしますと，1911年生まれです。つまり，今年が生誕100年です。1980年に亡くなっておりますが，ある本では1981年死去となっていたりします。1980年の大



スライド2



スライド3

スライド 4

晦日に亡くなって，どの段階で亡くなったかわからないので，81年とした資料もあるわけです。生まれはカナダのアルバータ州のエドモントンです。マニトバ大学から英文学の学士号と修士号を取得していますが，実は，マニトバ大学には工学部で入学しました。途中で英文学に専門を変えて，学士と修士を取りました。ケンブリッジ大学のトリニティホールに留学します。トリニティカレッジと表記があったりしますが，間違いです。留学してみると，学士をもう一回取らなければいけなくなります。本当は修士号をすぐ取りたかったのですが，ケンブリッジ大学がそれを認めてくれないので，学士から取り直すことになりました。学士号取得後，一旦帰国して，セントルイス大学で教壇に立ちます。再度渡英して，修士号と博士号をケンブリッジ大学から取りました。もちろんこの学位も英文学に関するものです。博士の学位について言いますと，トマス・ナッシュという詩人の研究でした。ちなみに，指導教授はI・A・リチャーズです。あのオグデン＆リチャーズのリチャーズです。留学している頃に，ケンブリッジ流のニュークリティシズムの洗礼も受けています。博士号取得後，アサンプション大学を経て，終生の研究拠点になるトロント大学に46年に移ります。52年に教授に就任。ここからは皆さんも御存じだと思いますが，メディア研究を提唱して，60年代に北米発の一大ブームを巻き起こしました。日本もこの旋風の一部に入っておりました。日本で最も有名な紹介者は，あの竹村健一です。同時代でマクルーハンをお読みになった方もいらっしゃるかと思

いますが，幸か不幸か，非常にメディア受けするような形で紹介されるという経緯をたどります。

60年代にこのようなブームが起きるのですが，ブームの最中もマクルーハンのメディア研究は続いていきます。とはいえ，時代の寵児になってしまいましたので，60年代半ばから後半ぐらいの研究は，割と荒れています。本を出す一方で，例えば企業のアドバイザーのような仕事もやっていました。マーケティングで何か助言を求められるというような場面もありました。カナダの首相の顧問なんかをやっていた時期もあります。この期間に発表した仕事には，研究上はあまり見るべきものはないですね。

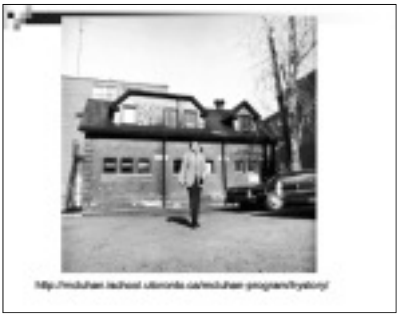
ざっと経歴と著作を追っていきます(スライド5)。画面に示しましたのは時代区分と主な著作です。駆け出しの学者のマクルーハンは，英文学者として教壇に立つようになりました。この頃は，主に文芸評論をやっておりました。ケンブリッジでニュークリティシズムの洗礼を受けておりましたが，割と保守的な，具体的な名前を出すと，『スワニー・レビュー』誌のような雑誌に投稿していたようです。言ってみれば，あまり泣かず飛ばずの平凡な研究者であった時代です。それがだんだん変わってきます。1951年の *The Mechanical Bride*。これは『機械の花嫁』という題で邦訳があります。ロラン・バルトに先駆けて，サブカルチャーを対象にした研究です。例えば，コマーシャルであるとか，映画であるとか，マンガなどを研究した先駆け的な研究です。ニュークリティシズムの影響を受けてやった仕事

スライド5

です。そして，メディア研究の観点から注目すべきなのが，1953年から59年の間にフォード財団からお金を得て発行した〝*Explorations*″という雑誌です。59年までに9巻出ました。この雑誌を介して非常に学際的な議論が繰り広げられました。〝*Explorations*″に寄稿した人物の名前を挙げますと，御存じの方がいるかと思いますが，例えば，批評理論のノースロップ・フライ，人類学のエドワード・ホールに，ハンス・セリエ。セリエの名前は聞いたことがない方がいらっしゃるでしょうが，ストレスという考え方を世に広めた医学生理学者で，ノーベル賞の候補にもなった人物です。それから，建築家のジークフリード・ギーディオンや，日本人ですと鈴木大拙なんかもこの雑誌に寄稿しております。そして，いよいよメディア・グル（メディアの導師）と言われるようになる時代がやってきます。この時期に書いた次の二つがマクルーハンの主著と言えます。一冊目が1962年の *Gutenberg Galaxy*，そして二冊目が1964年の *Understanding Media* です。それぞれ『グーテンベルグの銀河系』『メディア論』として邦訳されています。前者でカナダ総督賞のノンフィクション部門を受賞して，マクルーハンの名前が一気に広まりました。その後，マクルーハン旋風の最中の割と仕事が荒れた時期を経て，仕事をまとめる時期に入ります。次の二冊は日本であまり紹介されておりませんが，研究上は非常に重要な作品です。まず，*From Cliché to Archetype*。これは近々翻訳が出るという話も聞きます。それから *Laws of Media*。こちらはマクルーハンの死後に出版されたものです。息子のエリック・マクルーハンとの共編著の形をとっております。*Laws of Media* は『メディアの法則』の題で既に邦訳されています。

ざっと追いますと，このような区分でマクルーハンは進化していきました。

マクルーハンは，1962年にカナダ総督賞を取り，非常に注目される研究者になりました。トロント大学は，マクルーハンを他の大学に逃がしてはいかんというので，引き留め策を講じて，1963年に，「文化技術センター」というメディアを研究する研究施設を提供します。スライド（スライド6）にありますのは二代目の建物です。真ん中に写っているのがマクルーハン

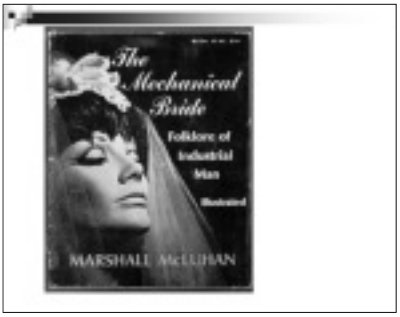


スライド6

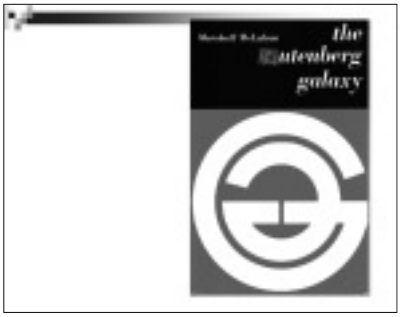
です。ちなみに，以前馬車小屋だった建物だそうです。ここがマクルーハンのメディア研究の拠点になりましたが,亡くなる年の1980年に取り壊されてしまいました。その後，トロント大学では，マクルーハンプログラムという形で研究が継承されています。

スライド（スライド7）は1951年の *The Mechanical Bride* です。これはハードカバーですね。それから，*The Gutenberg Galaxy*（スライド8）と *Understanding Media*（スライド9）です。

さて,マクルーハンはざっとこういう人物ですが,マクルーハンのメディア論を理解するのは，非常に難しい面があります。大変多くの著作を書いております。しかし，お読みになった方はご存知でしょうが，すべて非常に難解な文章で書かれています。私自身は，スライド（スライド10）に示

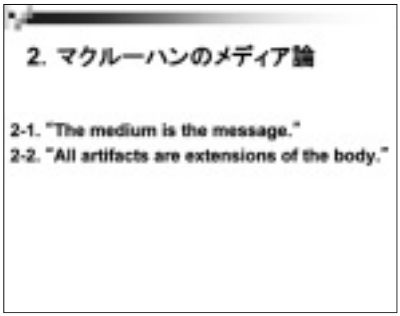


スライド7



スライド8

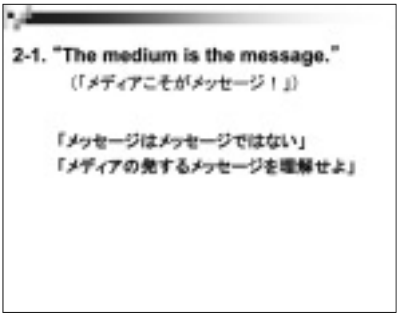
スライド 9



スライド 10

しました二つのテーゼから読み解くのが最もわかりやすく，なおかつ，マクルーハンの思想の核心に触れると考えます。

一つ目の「メディアはメッセージ」(スライド 11)。これは聞いたことがある方もいらっしゃるのではないでしょうか。1958 年に，ある講演会で発言したのが最初だと言われています。マクルーハンの代名詞のようなテーゼですね，メディアこそがメッセージであると，メディアに注目せよ，と言っていることが理解できます。このテーゼをもう少し分析しますと，次のように言えます。メディアはメッセージであり，メッセージはメッセージではない，と。メディアこそがメッセージであり，我々がメッセージと考えているメッセージの方は,本当はあまり重要ではない。いわば,「メディアの発するメッセージを理解せよ」と読みかえられます。我々がすべきな

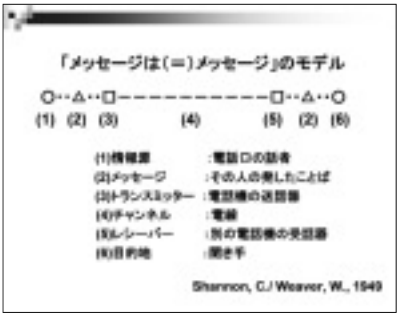


スライド 11

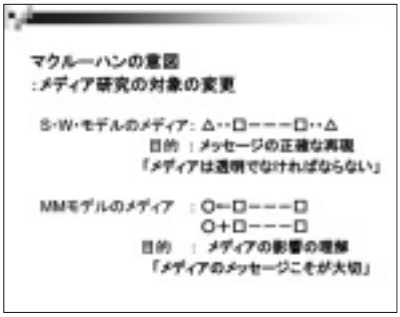
のは，メディアのメッセージを理解することである。

文脈がないとなかなかわかりづらいのですが，マクルーハンは，あるモデルを批判の対象にしています。クロード・シャノンとウォーレン・ウィーバーの通信モデルです(スライド 12)。シャノンは京都賞を取った通信分野の巨人です。非常になじみのあるモデルではないかと思います。情報源，電話を例にとりますと，電話口の話者が何か話します。そうすると，その言葉が電話の送話器を通ってシグナルに変換されます。電話の場合は有線を通って受信機のレシーバーに届き，シグナルが人間の言葉に変換されて，電話の向こう側の人がそれを聞きます。この場合，メディアというのは，通常スライドに示した項目の(3)から(5)までの間，あるいは(4)を指します。我々は，メディアというと，通常，これらの部分を考えます。このような発想は，もちろんマクルーハンの時代は，現在よりも強かったでしょう。「メディアはメッセージ」に込められたマクルーハンの意図は，まずは，通信モデルから離れよ，メディア研究の対象を変更せよ，というところにありました。

シャノンとウィーバーのモデルにおけるメディアの概念を取り出してみました(スライド 13)。通信モデルでは，メッセージをこちら側で再現するというところにメディアの役割というものが還元されてしまう。メッセージの正確な再現が，このモデルの一番重要なテーマです。そうすると，メディアというのは透明でなければならなくなります。つまり，メディアと



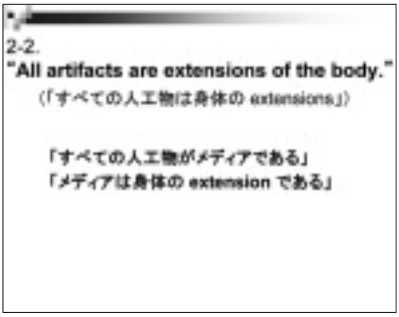
スライド 12



スライド 13

は，それがどのようなものであっても，受け手が送り手の意図を再現できる装置でなければいけない。通信モデルに則ると，メディアはこのように見られるわけですね。仮にメディアがメッセージに干渉すると，排除すべきノイズの発生源として扱われるわけです。マクルーハンは，モデルの転換を図り，新しいメディアの概念を提出しようとしました。マクルーハンは，スライドにある四角の部分のメディアを使用することで，話者にどのような影響を与えるのか，あるいは，話者がメディアと一体になったときに，どのような影響があるのか，を重視しました。メディア研究の目的は，このような意味でのメディアの影響を理解することだと考えました。言い換えると，電話で何を話したか，電話でどのようなメッセージを送り手から受けたのかという点ではなくて，電話を使うことでどのような影響を我々が受けるのだろうか，こちらに主題を転換しようとしたわけですね。一言で言いますと，メディアのメッセージこそが大切である，と。以上が「メディアはメッセージ」というテーゼの言わんとしたところです。

さて，それでは，メディアのメッセージを分析する際に，マクルーハンは，どのような手法をとったのでしょうか。ここで二つ目のテーゼが出てきます（スライド 14）。〝All artifacts are extensions of the body〟。すべての人工物は身体のエクステンションズである。このテーゼは，メディア論に限らず様々な分野で非常によく目にします。マクルーハンは，すべての人工物がメディアであると考えました。メディアという概念は All arti-

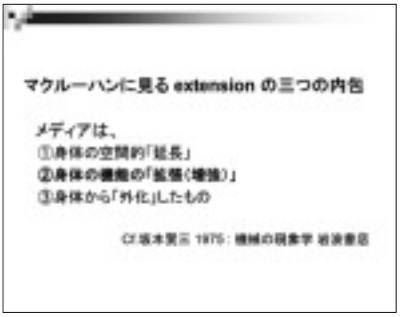


スライド 14

facts に置きかえられ，そして，メディアは身体の extensions として理解すべきである，と。

さて，このテーゼなのですが，実は三つの内包を持っています（スライド 15)。extension の語には「延長」「拡張」「外化」の三つの意味が含まれているのです。マクルーハン研究者の中でも，この三つを区分けする研究というのはこれまでありませんでした。違う意味で使っているね，というような言い方はしていますが，三つ区分を前提に，マクルーハンがかなり意識的にこれら三つを組み合わせて自分の理論を構築していることを指摘した研究は，ありません。ちなみに，この三つの区分け自体は，私のオリジナルではありません。もう亡くなりましたが，技術哲学の分野で活躍した坂本賢三さんが，『機械の現象学』の中でこの三つを取り上げています。坂本さん御自身は，専ら「外化」の意味の extension の研究をおやりになりました。「外化」以外にもこういう（「拡張」「延長」の）意味がありそうだ，というような書き方をしておられます。坂本さんの研究を踏まえまして，私が学位論文でやったのが，三つの概念がそれぞれどのような歴史を持っているのか，思想的な系譜をたどってその変遷を追い，マクルーハンの理論が持つ思想的背景を明らかにし，どのような思想に基づいて組み立てられているかの分析です。

まず，「延長」から見ていきましょう（スライド 16)。道具の使用時に見られる身体の空間的延長を指すので，「延長」と訳しました。道具と身体の



スライド 15

スライド 16

境界が移動する様子を記述する場合によく出てきますね。同じ箇所に出てくることばとしては boundary，prolonge（仏），それから Erweiterte Körper などがあります。例えば，カール・ヤスパース，モーリス・メルロ＝ポンティ，マイケル・ポラニイ，ジェームズ・ギブソンの文章に出てくる extension は，この意味で理解できます。「延長」の具体例として，鉛筆を持ちます。鉛筆を持って何かを書くときに，自分の体が鉛筆の先，つまり，ペン先まで延びているという感覚を経験すると思います。目の見えない人が白杖を使って歩けるようになるには，その白杖が自分の体の「延長」になっていなければならない，などと言いますし，車をうまく運転できるようになるためには，車の外側が自分の皮膚の「延長」のようになっていなければいけない，などとも言います。このような言い方は，比較的なじみの深いものだと思います。マウスもそうですね。マウスがうまく使えるようになるということは，手に持っているマウスが意識を妨げるような形態であってはいけません。マウスが手の「延長」のようになって，私とマウスのインターフェース，つまりバウンダリーが，画面上のポインターの箇所に移動していることが必要です。認知科学やインターフェース論，発達心理学がとりあげられる extension のほとんどが「延長」です。

次に，「拡張」または「増強」と訳出すべき extension があります（スライド 17）。通常，「代行」や「置き換え」による機能の増大という文脈で用いられます。同じ箇所に出てくる語としては，置き換えの意味の substi-

スライド 17

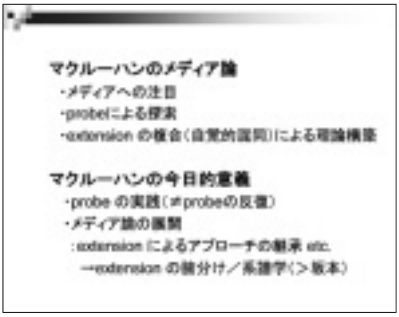
tute，replace，「拡張」される機能を指すfunction，そして「拡張」の動詞形のextend，enhance，augment，amplifyです。enhanceという言葉の使用からわかるように，現在のエンハンスメント論争は，「拡張」の系譜の延長線上にあります。「拡張」に基づいて思想を展開した代表的な人物に，ヴァネヴァー・ブッシュがいます。ブッシュは，1940年代末に，コンピューターに仕事を代行させることで仕事量が増大するというような議論をした人です。それから，エドワード・ホールも，「拡張」の意味でextensionを使っております。サイモン・ラモも，コンピューターの考察でextensionを使いました。最近だと，ケヴィン・ウォーリックというレディング大学でサイボーグを研究している人の記述にも，「拡張」の意味のextensionが出てきます。お分かりのように，「拡張」の議論は，技術論では実は非常にオーソドックスです。

それから三つ目の「外化」と訳出すべきextensionがあります（スライド18）。おそらく皆さんに一番なじみのない話しです。externalization，outering，placing out，extérioriser，Entäußerung，projectionなどで言い換えられます。人間が作った物（人工物）は，身体器官が外に出たもの，つまり「外化」したものであり，「外化」したものを通じて，それを外に出した身体の内部を探っていこうという議論で，19世紀末の技術論で一番注目されたアイディアです。一例に，レンズの発明によって目の構造がわかるようになった，というのがあります。コンピューターの発明によって脳の

スライド18

構造がわかるようになった，というのも同じ発想です。レンズは身体から外化した人工物であり，外化したレンズによって，レンズを外化した身体の内部構造，この場合は目の水晶体の構造が明らかになる，という議論です。「外化」の技術論で最も有名なのがエルンスト・カップです。カップが活躍した 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて，ドイツを中心に「外化」に基づく技術論が非常に盛んでした。「外化」の技術論は「器官射影説 projection theory」とも言われます。「外化」の系譜を辿ると，医学思想に起源を持つことが分かりました。

マクルーハンのメディア論の特徴は，メディアへの注目，それから，三つの extension の複合による理論構築，の二点にまとめられます（スライド 19）。では，マクルーハンを今日読む意義は何でしょうか。それは，マクルーハンを引用することではなく，そのメディア論を展開していくことにあります。そして，メディア論を展開する際の一つの方向性として，extension に基づくアプローチを継承していくことがあると考えるわけです。スライドに，probe という語があります。この probe が，マクルーハンの思想を分かりにくくしています。マクルーハンの本を読まれた方は感じると思いますが，はっきり言って，よく分かりません。例えば，「メディアはメッセージ」のフレーズは有名ですが，これを別の場所で「メディアはマッサージ」と言い換えたり，「メディアはマス・エイジ」と言い換えたりする。マクルーハンの本は，いわば，たわごとの羅列です。これはなぜなのか。その答え



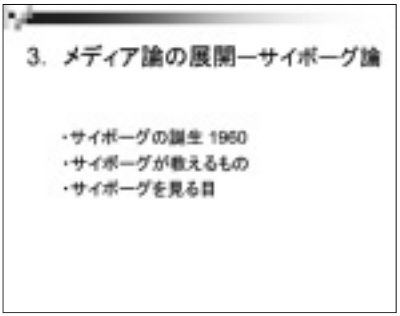
スライド 19

は，たわごとこそ，マクルーハンが戦略的に選択した，マクルーハン流のメディア研究の方法だからです。probeは，探索針という意味です。人を驚かせるようなたわごとを環境中に発してみて，それによって生じる揺らぎから，現在のメディア環境を知る手がかりを得ようという戦略です。だとすれば，プローブとしての発言は，マクルーハンが生きていた時代に有効であっても，現在有効であるとは限らない。むしろ，有効でない場合の方が多い。にもかかわらず，研究者の多くが，たわごとにすぎないprobeを引用して，「マクルーハンの言っていることはなるほど正しかった」，「今になってマクルーハンの新しいことがわかった」，「コンピューターはこの箇所で説明できる」などど，間違った受容をしてまいりました。probeは，使い捨てのことばです。捨てられたものを引用して，現在それが有効であるというような受容の仕方は，マクルーハン研究として全く間違っています。そうではなく，メディアへの注目という点を深化させて，例えば，probeをつくるもとになったextensionの概念を現在に適用して考えてみることが，マクルーハン研究の前向きな展開になるのではないかと考えるわけです。

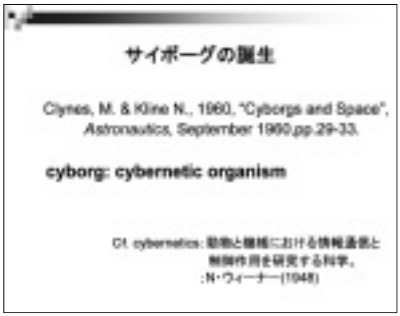
非常に駆け足でしたが，以上が私のマクルーハン理解です。では，マクルーハンの研究はサイボーグ論とどのような接点を持つのでしょうか。実は，サイボーグという言葉は，extensionという言葉とともに生まれたのです。

「メディア論の展開―サイボーグ論」と題して，「サイボーグの誕生」「サイボーグが教えるもの」「サイボーグを見る目」の三点をお話します（スライド20）。

まず「サイボーグの誕生」（スライド21）。M・クラインズとN・クラインという二人の人物によってサイボーグという語が生まれました。最終的には，クラインズが正式な生みの親ということになります。サイボーグが誕生したのは1960年です。つまり，1960年以前に，サイボーグという語は存在しません。〝Cyborgs and space〟という二人の共著論文にサイボーグという語が初めて登場します。〝Cyborgs　and　space〟が掲載された



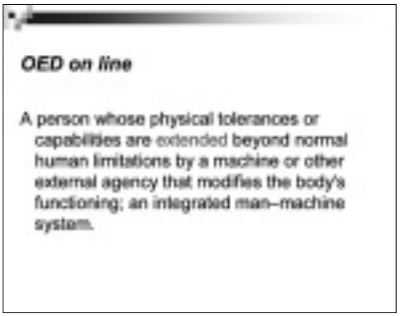
スライド 20



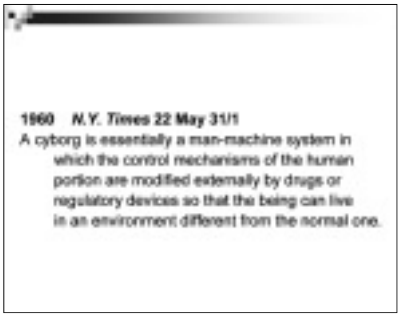
スライド 21

Astronautics 誌は，空軍の雑誌です。空軍の雑誌に，クラインズというサイバネティクスが専門の工学者で，ドクター・オブ・サイエンスの学位を持つ人物，そしてメディカルドクターのクラインが協働して寄稿しました。なぜでしょうか。1960 年は，スプートニック号打ち上げの後の，ミサイル・ギャップが深刻になった時期です。第二次世界大戦後間もなく，米ソは冷戦に入っていきますが，ソビエトがミサイル開発で一歩先んじたのがこの時期です。アメリカはソビエトを追い越さないといけない。そのために，宇宙に人間が出ていって，ソビエトに打撃を与えるような技術を開発しようとしました。1960 年は，核軍拡を背景に宇宙開発が始まった時期なのです。宇宙に出ていくには，どのような装備，あるいは薬が必要か，それが宇宙開発の喫緊の課題でした。そこで，工学者と医学者の出番です。フラハーティという空軍の大佐が，まずクラインに話を持ちかけました。クラインが，同僚のクラインズを誘って，シンポジウムで話した内容にサイボーグの語が登場したというわけです。サイボーグ cyborg は，cybernetic organism をつなげたものです。サイバネティクスは，N・ウィーナーが 1948 年に提唱し始めた新しい研究分野です。

サイボーグの語は，OED（Oxford English Dictionary）のオンライン版にも載っている，市民権を得たことばです（スライド 22）。決して SF の中のつくり話ではなく，出自がはっきりした由緒正しい存在です。いくつかの辞書にも項目があります。引用にありますように，サイボーグは extend



スライド 22



スライド 23

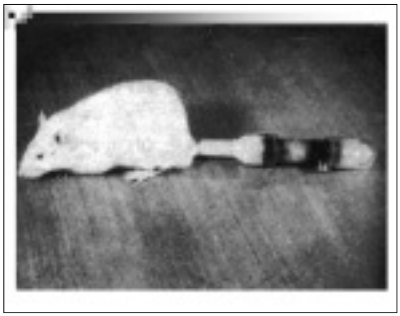
という語とともに誕生しました。通常の人間の限界を機械等によって extend する，つまり，宇宙空間では循環器系や呼吸器系に障害が出ることが予測されるので，欠損した機能を機械で代行することで，身体をサポートしよう，そして，地球上で活動している正常な状態に引き上げ，さらに，正常を超える状態まで引き上げようというのがサイボーグの思想です。

OED オンライン版に載っているサイボーグの初出文献は，日付が 1960 年の 5 月になっています（スライド 23）。〝Cyborgs and space〟の発表が 9 月なので，この文献は何かと思い，調べてみると，その正体は，例のシンポジウムの宣伝記事でした。こんな変わったシンポジウムがありますよというので新聞記事になったわけです。ともかく，本体は〝Cyborgs and space〟と見做して間違いありません。

さて，〝Cyborgs and space〟からの引用（スライド 24）をご覧になってわかるように，extend，それから function が出てまいります。何かに置きかえることによって，機能を増大する，あるいは低下していた機能を補うというような意味で，extension が使われています。ここから，サイボーグが，「拡張」の思想の一端に位置していることが分かります。

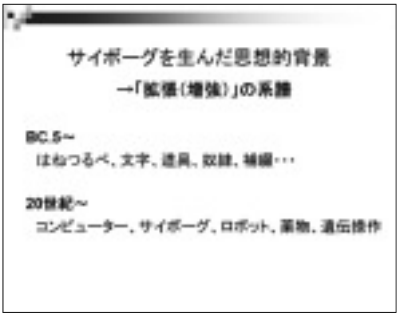
これは〝Cyborgs and space〟に載っている写真です（スライド 25）。ネズミの尻尾につながっているのは，浸透圧ポンプです。この浸透圧ポンプは，分泌系の機能を助け，extend するためのものです。このネズミが，言ってみれば，実物サイボーグの第 1 号です。

スライド 24



スライド 25

以上の「サイボーグの誕生」に続いて，「サイボーグが教えるもの」についてお話します。これまでの考察から，サイボーグの思想が，「拡張」や「増強」の系譜に連なることがお分かりになったと思います。前に述べた通り，技術論における「拡張」の語の分節作業は，坂本賢三さんの業績です。しかし，坂本さんは，「拡張」がどのような思想的な背景を持っているかということについては考察しておりませんでした。私はそこらへんをちょっとやってみたわけです(スライド 26)。例えば，サイボーグに先立って，コンピューターが社会に導入されました。このときにも，extension，そして extend の語が，replace，substitute とともに使われました。ロボットの場合も同様です。昨今のエンハンスメント論争でも，薬物，それから遺伝子操作も，extension によって語られています。いわば，これらすべての事象

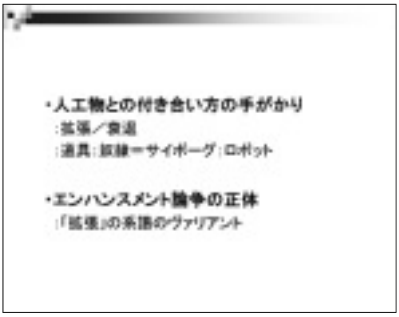


スライド 26

は「拡張」の系譜の中で語られています。時代をどんどん遡ると，「拡張」によって語られた最も古い事象は，おそらく，「はねつるべ」の使用です。はねつるべの説話は，『荘子』に出てまいります。どういう説話かといいますと，孔子の弟子の子貢が，老人に，水を効率よく汲むためにはねつるべを使ってはどうか，と言います。これに対して，老人は，そのような道具に頼ると，本来の機能が衰退するからやめておく，というようなことを言い返します。同様の説話は，プラトンの『パイドロス』にもありますね。発明神のテウト（トト）が，新たに発明した道具としての文字をエジプト王のタモスに披露します。そうすると，このような道具に頼ることで，我々の記憶力と思考力はむしろ低下するであろう，というように反論される。アリストテレスの『政治学』には，道具と奴隷を同一視するくだりがあります。これも，代行による仕事量の増大を問題にしたものです。それから，義足等の補綴技術も，extensionの思想によって語られてきた対象です。

「拡張」に着目すると，サイボーグが，以上のような，いわばありふれた技術論のごく最近の現象であることが分かってまいります。

サイボーグがこのような思想的系譜にあることが分かることで，人工物とのつき合い方の手がかりが得られるだろうと思います(スライド27)。時代を遡り，古典を参照しますと，「拡張」は，常に「衰退」と対になっていたことが分かりました。昨今の議論では，「拡張」の面ばかり強調されていますが，「拡張」の議論の原初においては，「拡張」がその反面として何か

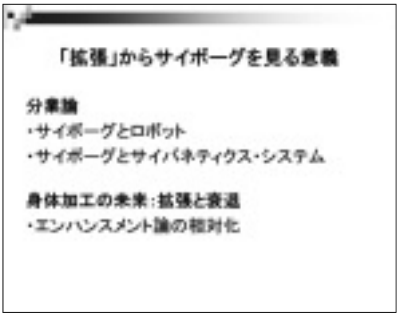


スライド27

を「衰退」させることが念頭にありました。この知見は，現在のエンハンスメント論争へのアンチテーゼとして，非常に重要です。エンハンスメント論争というのは，その名前からわかるように，「拡張」の系譜の末端に位置しながら，「拡張」の一面のみを強調する議論です。それを指摘できるのが，「拡張」の思想的系譜の研究のメリットの一つと言えましょうか。それから，道具と奴隷をパラレルに考える視点が『政治学』に出てきました。「拡張」の文脈で『政治学』を読むことは，人間と道具（機械）が融合したサイボーグと，機械的な奴隷であるロボットの使用が同根であることを教えてくれます。

最後に，「サイボーグを見る目」として，「拡張」からサイボーグを見ることの意義についてお話します(スライド 28)。これは構想段階ですが，人間と機械の分業論として，その形態が適正か，または適正でないかというような方向から，サイボーグやロボットを見ていくことです。それから，身体加工の未来についても考えなければなりません。先に述べたように，サイボーグの導入については，「拡張」のみならず「衰退」の面も考察しなければいけない。「拡張」の系譜学は，広い意味でのエンハンスメント論争を相対化する視点を与えてくれたわけです。

結論。サイボーグとは何か。サイボーグは，メディア研究の対象である。したがって，メディア論の授業で取り上げてもよい。サイボーグは，非常にアクチュアルな対象であるという点で，メディア論を活性化させる現在



スライド 28

そのものでもあります。つまり，サイボーグであるとかロボットを見ないでメディア論を語っていくということは，学としてのメディア論の衰退につながります。サイボーグ論というのは，言ってみれば，メディア論の一部門として今後も研究されなければいけないものなのです。

以上，メディア論の授業でサイボーグを取り上げる言い訳 pretext は納得していただけたでしょうか。

ちょうどいい時間になりましたが，最後に「おまけ」。話は戻ります。マクルーハンがメディア研究を始めた背景には，秘話（悲話）がありました。

「1936年，私は，ウィンスコンシン大学に赴任しました。学部1年生の授業を担当してすぐ，彼らは理解できないのに驚かされました。そして，広告やゲームや映画などの彼らが慣れ親しむ大衆文化の研究が急務であると感じた。これ（つまり，メディアの研究）は，教育学であり，私の教育プログラムの一部だった。ポップカルチャーの世界という彼らの土俵に上ったのは，教育上の方針からだった」。「また，広告はアプローチするのに極めて便利な形式だった(つまり，これが対象にした理由ですね。それから，これは対象にしても問題なかったから対象にしたのだと)。「機械の花嫁」(これは，サブカルチャーを扱った1951年の著作です）で広告を取り上げたのも，広告を使うのに許可を必要としないという法的配慮からである(つまり，材料として取り上げるのに規制がなかったからです)。授業では広告のほかに映画や雑誌の画像も使用した。私は30〜40枚のスライドを使って短い講義をした後で，学生に広告について考えるように促した」。

この引用は，確か1967年頃のインタビューで答えたものです。学生に対する戸惑いからメディア論が生まれたというふうに言えると思うのですね。もし，非常に優秀な英文学の学生がそろった大学に赴任していたならば，メディア論というのは生まれなかったかもしれないわけです。

まだ時間があるのでもう一つお話しします。サイボーグとロボットの境界が非常にあいまいで，むしろ，いっしょくたに考えるところから始めた方がいいのではないかということです。これ，御存じですか(スライド29)(*The Terminator* 1984)。ターミネーターはロボットだと思いますか，サ

イボーグだと思いますか。映画の中ではサイボーグって言っている箇所があります。人工的な骨格に人間由来の肉が付いているのでサイボーグであると。しかし，ロボットのようですね。

これは「ブレードランナー」（*Blade Runner* 1982）のレプリカント（スライド 30）。レプリカントは，映画の中で非常に印象的なことを言っている。おれたちはロボットじゃないんだ，と言うのです。じゃ，何なのだと。わかりません。どういう対象として分析していいのか迷うところですね。人間の，いわばレプリカとして，人間以上の，つまり，extension としては人間を超える仕事を行える，そのような存在をどのように扱うべきなのか。それは，もしかしたら将来扱わなければいけない，近い将来とは言いませんが，問題かもしれません。

これは本田技研の ASIMO の前身です（スライド 31）。

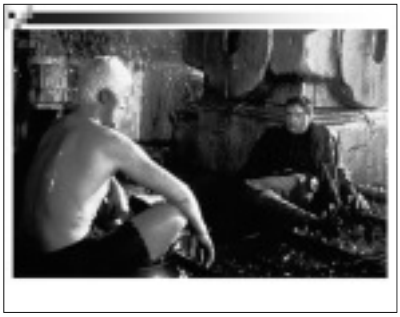
これはロボットなのでしょうね，R2-D2（*Star Wars*）（スライド 32）。

これは三菱重工の「若丸（わかまる）」というロボットです（スライド 33）。実際にあるものです。

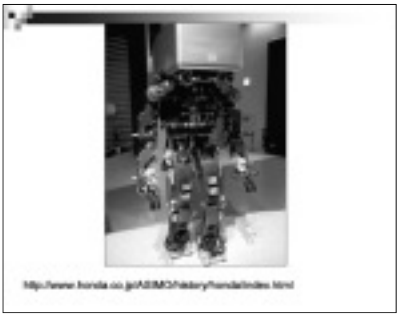
これは，動くと相当気持ち悪いのですけれども，知覚があります（スライド 34）。知覚に反応するロボット。知覚の発達を見るという目的で開発された，CB2 というロボットです（大阪大学浅田稔研究室）。

これも相当気持ち悪いです（スライド 35）。これは，大阪大学の石黒浩さんで，今をときめくロボット学者ですが，こっち側（左側）が本物です。

スライド 29



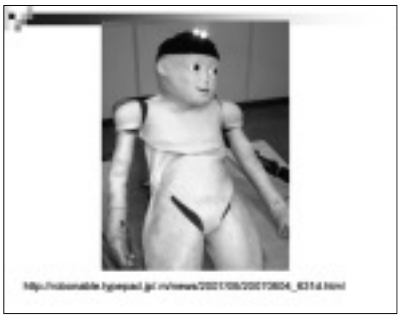
スライド 30



スライド 31

スライド 32

スライド 33



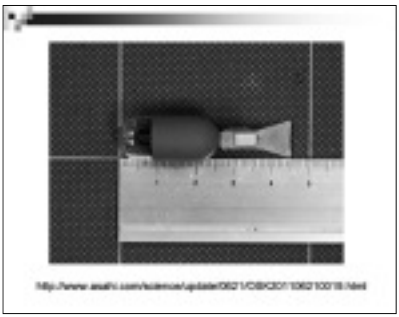
スライド 34

というのはうそで，こっち（右側）が本物です。「ジェミノイド」というロボットだそうです。自分と全く同じものを再現しようということに，この人は命を賭けておりますね。これも，どっちが本物か，なかなかわからない(スライド 36)。展覧会場の受付に座らせて，別室で操作すると，ぱくぱく動くわけです。老人はわからないそうです。

これも，ロボットなのかサイボーグなのかわかりません（スライド 37)。前方に内視鏡がついています（マーメイド；龍谷大学大塚尚武教授のグループと大阪医科大学樋口和秀教授のグループの共同開発)。これを飲んで,内視鏡と同じ効果が得られるようになってまいりました。何でサイボーグなのかなというと，仮にこれを遠隔操作できるようになった場合に，これは言ってみれば，身体の「延長」として，操作する人間と一体のサイボーグの一部と見做せるという解釈だってあるわけですよね。

スライド 35

スライド 36



スライド 37

スライド 38

現在，手術はこうやってやるそうですね(スライド 38)。右側のベッドに患者が寝ていますが，医師はそちらに向いていません。患者の患部には，大きな動きを小さな動きに変換できる機械の効果機が接しています。この機械によって医師は微細な手術ができるのだから，機能を extend しているわけです（da Vinci surgical system；intuitive surgical 社)。前の内視鏡と同じく，医師と機械がサイボーグになっているのか，あるいはこの機械全体をロボットと見るのか，二つの事象はなかなか分離しがたいであろうと。

これは，例の原発で活躍した遠隔操作のロボットの仲間です(TALON；QinetiQ 社）（スライド 39)。

それから，これも有名ですね(スライド 40)。グローバルホークといって，イラク戦争の偵察に使われました（global hawk；northrop grumman

スライド 39

スライド 40

社)。爆撃機能を備えた無人航空機も出現しました。いずれもアメリカが開発しました。一見ロボットのようですが，アメリカ本土にある空軍基地で操作して，アフガニスタンで爆弾を落としたりする。そのとき，操縦者は機械と一体になり，グローバルホークはロボットではなくサイボーグの一部になっている，という解釈も不可能ではない。グローバルホークが，ジョイスティックではなく，直接脳から指令を受け取るようになった場合は，果たしてどうなるだろうかという問題がある。この分野（BMI）の研究は非常に発達していまして，もう電極を直接脳に挿して信号を取るということもやっております。

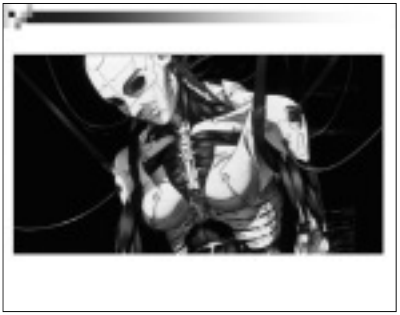
これは「エイリアン2」(*Aliens* 1986）だったかな，サイボーグっぽいですね（スライド41)。これもSFの中のお話といふうには片づけられない。実際に似たようなものが既にあります。

こちらはどうですか，ニュースでご覧になったことはありませんか（スライド42)。筑波大学の山海研究室が研究開発している「HAL（ハル)」という外骨格です。山海教授はCYBERDYNEという会社をつくって，実際もう，例えば，介護の現場なんかに導入が始まっています。HALを着けると，30 kgくらいの米俵を片手で持てるようになるそうです。まさにextensionですね。

SFの世界では，人間は将来こうなるのではないかと考えられています（*Ghost in the Shell* 1995）（スライド43)。脳だけを残して，すべてが機

スライド 41

スライド 42



スライド 43

スライド 44

械化されるのではないかと。

その夢を実現するために頑張っているのがこの方ですね（スライド 44）。ケヴィン・ウォーリックです。レディング大学でサイボーグを研究しています。実際，自分の前腕に電極を埋め込みました（スライド 45）。この段階ですと，まだ接近するとゲートが自動的に開くとかいうぐらいでしたが，この技術が進んで，こんなことができるようになりました（スライド 46）。自分の手を動かす動作によって，遠隔地にある技手に同じ動きをさせることができます。ウォーリックさんは，将来，こうしたいようですね（スライド 47）。額にチップをつけていますが，意味深長です。現在も現役で活躍されています。

ウォーリックのような人たちの言説を見ていくと，extension という言葉が頻出する。現在のサイボーグ技術も，extension の系譜の延長線上にあ

スライド 45

スライド 46

スライド 47

スライド 48

ることが分かります。

あと１分程度。トロント大学コミュニケーション学派についてお話します。

メディア研究は，ある日突然マクルーハンが始めた学際研究かというと，実はそうではなくて，きちんとした学問的な背景がある。マクルーハンのメディア研究に学問的基礎を与えた一つ前の世代がいました。こちらが『プラトン序説』を書いたエリック・ハヴロックです（スライド 48）。ロンドンに生まれ，ケンブリッジ大学のエマニュエルカレッジで古典研究をおさめました。カナダのアカディア大学を経て，トロント大学に着任。トロント大学でマクルーハンと一緒に過ごした時間は二，三年ですが，非常に大きな影響を受けたことが推測できる。ハーバード大学に異動した後に，スターリング・プロフェッサー兼古典学教授としてイェール大学に迎えられた人

物です。ハヴロックがどのような研究をしたかといいますと，プラトンの『国家』に出てくる詩人追放に新たな解釈を与えました。なぜプラントは理想の国家から詩人を追放しなければならなかったのか。ハヴロックは，『国家』が書かれたのが主要なリテラシーの移行期であったという前提で，この謎に挑みました。詩人（吟遊詩人）たちのリテラシーは，声に基づくものだった。口伝えで聞き，それを再現する能力が重宝されます。そうすると，聞きやすく，覚えやすく，再現しやすいというところに中心を置いてリテラシーを組み立てるようになる。このような声を軸にしたリテラシーに対し，プラトンは，文字を軸にしたリテラシーを重視した。文字の発明自体はプラトンの生きた時代より相当前でしたが，プラトンの頃になってようやく文字を国家の主要なリテラシーにしようという発想が出てきた。これからの教育は，詩人のようなリテラシーを教えてはだめだ。文字を使い，もっと論理的で一貫性を持って考えるようにならなければならない。そう考えるとき，詩人は，時代に逆行する存在として立ち現われ，国家から追放しなければならなくなる。ハヴロックは，新しいメディアによって社会が変動した事例として『国家』を捉え直しました。マクルーハンのメディア研究には，ハヴロックの着想が大きく寄与していると考えられます。左が *Preface to Plato*，右が邦訳の『プラトン序説』（スライド 49）。公刊が 1963 年で，*The Gutenberg Galaxy* より後ですが，研究自体はずっと以前に完成していました。

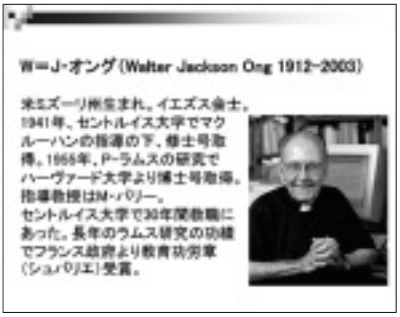
スライド 49

それから，トロント大学コミュニケーション学派の重要人物をもう１人挙げます。イエズス会士でもあったウォルター・オングです(スライド50)。セントルイス大学でマクルーハンの指導のもと，修士号を取得します。つまり，マクルーハンの弟子ですが，中世を中心にした文献研究の力はマクルーハンよりも優れていました。ペトルス・ラムスの研究でハーバード大学から博士号を取得していますが，そのときの指導教授はミルマン・パリーです。パリーも非常に重要な人物です。ホメロスの叙事詩の非一貫性や時間を縦断し，空間を横断する語彙の使用を，吟遊詩人に特有のリテラシーから解明した人です。オングの主著もしっかり日本語になっています（スライド51)。声の時代と文字の時代の思考の違いを問題にした，とてもよい本です。

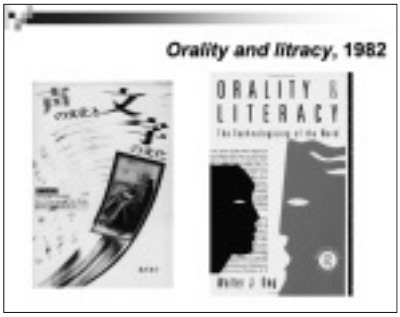
リテラシーの変化に着目し，それにメディアが大きく関わっているとする前提は，以上の先行研究によって力を得ていたと言っても過言ではありません。この前提を出発点に，マクルーハンは，当時最新のメディアだったテレビを中心に，様々なメディアを考察したのです。以上がトロント大学コミュニケーション学派のお話です。

ちょうどいい感じですか。では終わります。

○**司　会**　どうもありがとうございました。別世界を知らされたような気がします。まだまだ時間は余裕がありますので，質問をしていただければと思います。いかがでしょうか。



スライド50



スライド51

○質問者　マクルーハンの専門家に，こういうふうに丁寧にわかりやすく教えていただいて，本当にありがとうございました。すごく興味深い発表であったというふうに思います。幾つか質問があるのですが，マクルーハンの先生ですよね，オグデン＆リチャーズのリチャーズですよね，彼らのやったことで有名なのはやっぱり，意味の三角形という，あの図，非常に有名な図がありますけれども，そういうのを考えると，あるいはまた，ニュークリティシズムという学問にもそこで，どこでしたっけ，ケンブリッジでしたっけ，触れたということを考えますと，そこで，マクルーハンに対して，そのメディアという考え方にすごく影響を与えたのではないかというふうに思います。というのも，オグデン＆リチャーズにせよ，ニュークリティシズムにせよ，言語を，きょうの発表の言葉を使いますと，透明な媒体として考えるのではない立場だからです。特に，そのニュークリティシズムであれば，その作者の意図，伝えるための透明な媒体ではないという考え方ですよね，ニュークリティシズムというのは。というわけで，マクルーハンのメディア論に，オグデン＆リチャーズやニュークリティシズムの考え方というのはどういうふうに影響を与えたのかというのを柴田先生にお伺いしたいと思います。

もう一つなのですけれども，もう一つは私の個人的な関心で，フランスの思想家でアンリ・ベルクソンっていますが，ベルクソンも，道具というのは身体の延長であるというふうに言っています。知性を持った人間は，体の外にそういう道具をつくると，動物は，本能によって自分の体を変形させると，そういうふうに言うのですよね。自分の体が，すなわち道具であると，そういうふうに言うわけです。例えばモグラの手でもいいです。モグラの手は，土を掘るためにあると。自分の体を変形させる。人間のほうは，知性によって体の外に道具をつくりだすと，そういうふうに言っているのですね。何かすごく近い話かなと思いまして，マクルーハンがベルクソンについて言及しているところがあれば教えていただきたいというふうに思います。以上です。

○柴田氏　まず，そのニュークリティシズム，それから「意味の意味」で

すよね。どういう影響があるのかということですけれども，まず，ニュークリティシズムは，おそらく，対象としていろいろなもの，これまで学問の対象になってこなかったようなものを研究していいのだというようなところに割と強く影響しているというふうに思います。それから，もちろん御指摘のように，それ自体の意味ですね，例えばメッセージを運ぶ箱かもしれないけれども，箱自体，意味は一体何だろうということで，そこに注目するという視点も，ケンブリッジ留学時代に涵養されたのかもしれませんね。ただ，マクルーハンへの影響という点で重要なのは，ケンブリッジで蒔かれた種の芽が，マクルーハンが提出したようなメディア論として育っていくには，ほかにどのような影響があったか，というところにあります。おっしゃるように，種を蒔いたという意味では，ケンブリッジ時代は非常に重要な時期だと言えると思います。その後，どのようにほかの条件がそろうことによって，主著で展開したようなメディア研究につながっていったのが，私自身はそのあたりを重点的にやっています。

それから，ベルクソンの話ですね，これはprolongeでしたか，確か『創造的進化』の中に……。

○質問者　『創造的進化』の中にありますね。

○柴田氏　ありますね。ベルクソンからの影響について指摘した研究者はいるのですけれども，マクルーハン自身は，おそらく主要な箇所では言及していないと記憶しています。もちろん，prolongeはextensionに分類できる考え方だと思います。直接参照していないとしても，人づてにベルクソンの思想を聞いて，理論構築で参考にしたことは十分考えられます。

一つ付け加えたいのは，前に述べたようにextensionは三つに区分けはできるわけですが，extensionを三つに区分して，完全に意識的に使っている例はむしろ少ない。ベルクソンは，「体の外に道具をつくった」と言っていますが，これは「外化」という面もあるかもしれないが，それが身体の一部であるという点では「延長」かもしれないですね。extensionという概念が非常に厄介なのは，実際の現象がそうであるという理由もあるのでしょうが，幾つも内包を重ねて使っているケースが非常に多い。私はベル

クソンの専門家ではないので断言はできないですけれども，ベルクソンは割と，extensionについては，無自覚というとちょっと言い過ぎですけれども，異なる系譜の概念をあいまいに重ねて使っている自覚がなかったのではないかというふうに分析しています。

○**司　会**　反論はありますか。

○**質問者**　いいえ，特にないです。

○**司　会**　ほかにいかがでしょうか。

○**質問者**　非常におもしろい話を伺いました。ありがとうございました。メディアの概念から始めてextensionの概念につなげた。そして，extensionに「拡張」「延長」「外化」の三種類があるというところから，サイボーグを論じる，サイボーグに関する思想にextensionとそれに類する幾つかの概念を見つけられるのではないかとおっしゃった。そして，そこから，サイボーグがメディア論の対象だというところに戻る。その過程で，ロボットとサイボーグが同根だとおっしゃったけれど，サイボーグもロボットや奴隷もメディアだと言って同列に扱うのは，概念の整理においてジャンプがあるのではないか。それが一つ。もう一つの質問。最後に出ていたエリック・ハヴロックと，ロード（パリーの弟子），この二人の研究の影響があるとすると，古代ギリシャの国家論あるいは神話の研究につながっていくと思いますが，そことメディアとのつながりです。もちろん詩人の声の研究という側面があるのでしょうけれど，神話とつながる側面は何かあるのでしょうか。

○**柴田氏**　ちょっと最後のところ，もう一回……。

○**質問者**　つまりですね，詩人自身が声を出してはいるけれども，あの声は，実は人間の声ではなくて，本来はムーサの声です。詩人はムーサの声を伝えるメディアであると。アリストテレス以前の詩学では，詩人の声は神の声でした。モーサの声をホメロスが伝えているのだと。そうすると，このような神話とメディアはどういう関係があるとお考えでしょうか。マクルーハンがこのような神話の影響を受けて，そのような意味での声の研究を延長し，整理していったかのか，ということを伺いたいのですけれど

も。

○**柴田氏**　まず最初ですね。まとめると，ロボットもサイボーグも本当にメディアなのか，というところだと思います。これには確かに飛躍が，飛躍というかジャンプがあります。このスライドにありますように（スライド14)，マクルーハンはメディアをすべての人工物に置きかえてしまうわけですね。マクルーハンのメディア論には，いわゆるコミュニケーションに関わるメディアだけがメディア研究の対象だというふうに言われているけれども，もちろん，歴史上，コミュニケーションメディアが大きな影響を与えてきたのは事実ですが，ほかの人工物も，コミュニケーションメディアがつくった銀河系の中に位置づけなければいけない，という前提があります。結果的に，すべてのartifactsの中で，いわゆるコミュニケーションメディアが主要な位置を占めるということになるかもしれませんが，一旦は，すべての人工物が何らかのメッセージを送っているというところから始めるべきだ，したがって，すべての人工物をメディアとして研究対象にしなければいけない，という構成です。まず1点目は，そんな感じでよろしいでしょうか。

○**質問者**　まあ，ある程度ジャンプがあるのではないかと。それで，サイボーグは特化しているところがあるとは考えませんか。特殊化していると。

○**柴田氏**　特殊化？　何に？

○**質問者**　つまり，サイボーグには，ボディの「延長」としてのメディアの側面を特化させる嫌いがあるのではないですか。もちろん，すべての人工物には，「延長」になるのだけれども。

○**柴田氏**　そこらあたりに飛躍があると。

○**質問者**　そうですね。

○**柴田氏**　確かにサイボーグを定義するときに，絶対に移植の事実がなければいけないと言う人もいます。他方，そうではなくて，例えば携帯電話のように，もう肌身離さず，言ってみれば依存状態になって使うようなもの，これは物理的には体から離れていますが，この事態もサイボーグ化してしまっていると言う人もいますね。つまり，物理的な接触の面に注目す

る向きもありますけれども，むしろ全部引っくるめて，例えばサイバネティックシステムとして，系として一つのまとまりを持っていればよい，というふうな視点が，実は一番妥当なのではないかと私は思います。古典を調べても，例えば，道具と奴隷を同列に見る記述がありますが，道具が使うときには身体の一部になる一方で，奴隷はそうではないですよね。しかし，それを同列に考えるということは，そこに，言ってみればサイバネティックシステム，系として，何か仕事を行うという考えの萌芽があるのではないかと思われます。つまり，物理的な接触がなくても，そこにまとまりがあれば同列に考えてよいという立場は，割とオーソドックスな考えなのではないかと思います。

○質問者　そう考えることで，ベネフィットといいますか，すごく研究の利益が，これまでよりはっきりした研究の利益が出るということを想定していると。

○柴田氏　そうです。

○質問者　わかりました。

○柴田氏　それから，二つ目ですね。直接のお答えになるかわかりませんけれども，マクルーハンは，じゃ，おまえは一体何者なんだ，と言われたときに，自分は詩人だというふうに答えるわけです。これは言ってみれば，見えないものを言語化する仕事です。その言語化するときに，アーキタイプというのを，おそらくユングのアーキタイプを前提にしているのでしょうが，想定しています。この部分で神話とかかわってきますし，それからマクルーハンは詩論も書いています。マクルーハンは，イメージとしては，おっしゃったように吟遊詩人のようなポジションで仕事をしていくのが，新しいメディア環境を対象化する上で必須なのではないか，と考えていたようです。ただ，神話自体の分析はあまりやってないですね。ただ，彼自身はカトリックに傾倒していくので，宗教と詩人としての立場の関係は，これから考えなければいけないと思います。

○質問者　ありがとうございました。

○司　会　ほかにいかがでしょうか。はい，どうぞ。

○質問者　本当に初めて聞くような話が多かったのですが，サイボーグ論やメディア論というのは，裏を返せば，要するに人間論だと思うのですけれども，人間の機能が拡大したり衰退する，あるいは人間の能力が拡大したり衰退するというのはよくわかるのですけれども，同時に，こういうサイボーグ論やメディア論が，人間の権利や義務というものに何らかの影響を与えるのかと。それによって，おそらく人間の概念というものがかなり変わってくるのではないかと。つまり，サイボーグが科学技術だとしたら，中立的な科学技術なんて，もうないというのが，おそらく最近そうなのではないかと思うのですよね。そうすると，何らかの価値観があって，それがいつの間にか人間概念というものを，あるいは権利や義務というものを変えていくのではないかというのが一つ，これは何かあれば教えてほしいと思います。

もう一つは，これはマクルーハンとかということではなくて，サイボーグ研究やロボット研究というものをすることによって，これに対して，例えば宗教界から何らかのメッセージや批判がもしあれば教えてほしい。つまり，生命倫理の問題と，これはクローン人間の問題というのは必ず出てくる。つまり，play God というのですかね，神を演ずる議論というのが科学者に対して出てくるのですけれども，ロボットやサイボーグというものに対して，何か宗教界から何らかのメッセージや批判が出ているのであれば，ちょっと教えていただきたいです。この2点お願いします。

○柴田氏　最初のほうですね，権利，サイボーグ研究はおそらくこの問題に突き当たると思います。人間の機能を何かに置きかえていったり，場合によっては臓器を機械に置きかえるというようなことをやっていくわけですが，その延長線上に，どこまで置きかえてしまうと人間でなくなるのか，つまり，ロボットになってしまうのかというような議論が来ると思うのですね。それはむしろ，SF の分野に，非常に刺激的な議論が，というか，必然なのでしょうけれども，そこを中心にした議論というのはあると思います。例えば，*Blade Runner* なんかそうですよね。それから，サイボーグに関しては，*Ghost in the Shell* はあなどれません。サイボーグ論自体の

内部では，そこまで根本的な議論をやっている人とやっていない人がいます。extension でサイボーグを語る人には，比較的この論点に敏感でない，といいましょうか，置きかえられるなら置きかえて能力を上げていけばいいんだ，これは人間の自然な傾向なのだ，というような言い方をする人が多いですね。エンハンスメント論の中で反対論者は，大方，やっぱりやっていいこととやっていけないことを分けるべきだというような言い方をします。この論点の行き着くところは，人間の最後のアイデンティティというのはどこなのかという話になると思います。これはもちろんおっしゃるように非常に重要な課題ですし，最終的にはそこまで答えないといけないというふうに思っています。やろうと思っていますけれども，まだまだです。

それから，二つ目が，宗教界から，サイボーグとかロボットについてどのような反応があるかと。非常に一般的な話をしますと，日本でロボット研究が進歩している理由としては，人間の似姿をしているものをつくることに抵抗がないという土壌があるからかもしれません。それから，サイボーグに関して宗教界からどういう意見があるかというのはちょっと知りませんが，もちろんエンハンスメント論に対しては，例えば，胚を幹細胞に使うことが，宗教上許される，許されないという発言は，もちろんありますね。

宗教界の反応とちょっと関連するのですけれども，このロボット（CB2）ですね（スライド 34）。YouTube で見ることができます。非常におもしろい書き込みがあります。このロボットはすごく気持ち悪いんです。何かこっちで音を立てると，きょろきょろと見て，手を挙げたりする。人間みたいなのです。この動画に「焼き殺してしまえ」という英語の書き込みがあったりする。つまり，こんなものつくるな，というような反応が，国籍はわかりませんけれども，おそらく英語圏の人にある。日本人はそういう反応は，気持ち悪いなと思うかもしれないけれども，ないのではないかと思うのですね。このような反応の違いは，一つには宗教的なベースによるものなのかもしれません。

ともかく，宗教界から直接，こういうものについて何か具体的な言及があったということは，今の段階ではちょっと聞いていないです，わかりません。

○**司　会**　そろそろ時間が参りましたけれども，どなか。

○**質問者**　もう一つお願いします。コミュニケーションとメディアの関係です。おっしゃるようにサイボーグを想定して，ロボットを想定してメディア論を考えてしまうと，メディアのコミュニケーションの議論に戻ることはできなくなってしまうのではないかと，それは大きな……。

○**柴田氏**　最近の傾向を見ていきますと，ロボットが単体で独立して動くということは，おそらく今後しばらくはないと思います。お聞きになったことがあるかもしれませんが，ユビキタス技術というのがあって，すべてのものにチップを埋め込んで，情報を管理して連携させるシステムをつくろうとしています。だから，一見，物理的に離れているからといって，情報の面でも離れているとは言えない状況になっています。ロボットも，いわば，大きなコミュニケーションの中の一項に位置づけられるという方向性があります。この傾向は多分これからずっと続くと思いますので，コミュニケーションを語ることとロボットを語ることが切り離せない時代になると思います。

○**司　会**　ほかにございますか。

それでは，柴田先生，どうもありがとうございました。(拍手)

きょうはお二人の報告，ふだん，あまり聞きなれないような話を，私なども非常に新しい，興味深い話を聞かせていただきました。やっぱり人文学ならではの講演だったのではないかと。今後ともこういう形で少しずつ進めていきたいと思います。

きょうはありがとうございました。(拍手)